言語社会研究科　博士論文要旨

著　　者　　橋本　恭子

論　文　題　目　　『華麗島文学志』とその時代　―比較文学者島田謹二の台湾体験―

学位取得年月日　　2010年5月19日

本論は比較文学者島田謹二（1901-1993）が戦前、日本統治時代の台湾で執筆した在台日本文学研究『華麗島文学志』を比較文学研究の実践と捉え、「日本近代比較文学史」および「台湾文学史」に位置づけてその意義を考察することを目的とする。特に着目したのは、15 年戦争の時代と植民地台湾という時空的条件が、島田の比較文学の思想形成にどのような影響を与えたか、という点であった。

まず第一章では、研究の前提として、「比較文学」とは何であるかを、島田謹二が影響を受けた両大戦間のフランスの比較文学に焦点を当てて、明らかにした。第一次大戦の原因となった偏狭なナショナリズムへの猛省から、フランスの比較文学者はこの時期、国際連盟の知的協力プログラムと連動し、文学の国際主義を掲げて寛容の精神を育成することに努め、学問は飛躍的に発展した。だが、1930 年代半ばに植民地台湾でそれを受容した島田謹二は、フランス比較文学の理念や時代的意義に言及することはなかった。

一方で島田は、斯学にヨーロッパ中心主義の限界も感じ取り、早くから「日本派比較文学」の確立を提唱し、自ら上田敏や森鴎外の翻訳詩研究によってそれを実践していく。その鴎外が台湾に係わっていたこともあり、島田は自然と台湾における日本文学の研究に着手し、やがてそれは『華麗島文学志』へと発展していった。

第二章では、『華麗島文学志』の形成過程を追いながら、全体像を明らかにすると同時に、これまで混用されてきた用語を整理した。一連の作業を通して、同書がこれまで誤解されてきたように、台湾人を無視した「台湾文学」研究ではなく、在台「日本文学」研究であることが明確になった。これは台湾に長期居住を覚悟した島田謹二が、台湾にいかに向き合うべきか、在台日本文学の過去・現在・未来を通じて考察した記録なのである。全体的には 12 編の作家作品論と外地文学論から成り、流れとしては日本領台以前の文学を前史とし、在台日本文学を史的に考察した上で、今後の課題を提起した。

島田はこれを一つの体系的な研究として構想するに当たり、まず「台湾文学」をこの島を支配した歴代宗主国の文学史の一部と定義し、「分業」を前提に日本文学の部分を研究対象に選んだ。だが、後にフランスの植民地文学研究を参考に、植民地における宗主国人の文学は「外地文学」、台湾人主体の文学は「台湾文学」へと定義を修正する。同時に、「外地文学」と「植民地文学」の訳語を整理し、それによって、在台日本人の文学＝日本文学＝外地文学、台湾人の文学＝台湾文学＝植民地文学という区別が明確化され、以後、島田の論考で「台湾文学」が論じられることはなかった。

第三章では、『華麗島文学志』の誕生を促した 1930 年代後半の在台日本人社会の状況を明らかにした。

領台 40 周年を迎えた台湾では、在台日本人社会の土着化が進み、「在台湾意識」が醸成されて、文芸の自治が模索されるようになっていた。続いて、日中戦争が勃発後すると、在台日本人の文芸意識が文芸愛好家の手慰みから、時代性・社会性を帯びたものへと変化する。さらに南進化政策が台湾を南方文化の中心に位置づけたことで、文化的な向上が叫ばれるようになった。

こうして、在台日本人文芸家は台湾独自の文学の確立を目指し、内地に向けて台湾在住者から見た「真の台湾の姿」を伝えるべきであるという義務感を抱くようになる。このような在台日本人の「台湾意識」こそ 1930 年代後半の「時代精神（ツァイト・ガイスト）」であり、『華麗島文学志』もその産物であった。同書を構成するほとんどの論文は、1939 年に集中的に発表され、同年末にはほぼ完成するが、これは西川満を中心とした全島的な台湾文壇再編のための文芸運動の一環であった。

第四章では、『華麗島文学志』の基礎理念である「外地文学論」の形成過程を明らかにしながら、特にキー概念の「エグゾティスム」と「レアリスム」について論じた。

島田謹二はまず、台湾で生まれた「郷土主義文学」を「外地文学」と捉え、「一般文学」（littérature générale）研究の方法によって、世界の「外地文学」との比較考察を試みる。島田はフランスの研究書を参考に、「外地文学」が植民地における宗主国人の文学であり、旅行者の手になる「エグゾティスム文学」への批判から生まれた「レアリスム」の文学であることを明らかにした。続いて、仏領インドシナの外地文学を参考に、「広義の郷愁の文学・外地景観描写の文学（エグゾティスム）・民族生活解釈の文学（レアリスム）」の三点を在台日本文学の今後の課題に挙げた。

島田のいうエグゾティスムとは、単に内地読者に媚びるような「似非エグゾティスム」ではなく、抒情性や芸術性の同義語であると同時に、台湾本来の姿に内側から迫ろうとする試みであり、台湾で新たな美意識や価値観を産出することであった。しかし、島田は「美しさ」だけでなく、内地に対して「真の台湾の姿」を発信すべきであるとの考えから、「レアリスム」の必要性を説く。ただし、宗主国人が植民地で「真の台湾の姿」を認識し、「レアリスム」の態度で描くことには困難があり、総督府の方針に抵触しない範囲で、「真実」を描こうとすれば、微温的な物語にならざるをえなかった。

第五章では、「台湾の文学的過現未」を中心に、『華麗島文学志』が 1940 年代の台湾文壇に投げかけた反響について考察した。

1940 年 1 月に日台人を糾合した台湾文芸家協会が結成され、機関誌『文芸台湾』が刊行されると、台湾の文学をめぐる環境は一変し、「台湾文学」と「外地文学」の概念も変化した。まず、台湾新文学運動から誕生した「台湾文学」の概念が、日台人双方の手になる文学へと拡大解釈され、それと同時に、在台日本人の文学を意味した「外地文学」が台湾人をも取り込み、「台湾文学」と「外地文学」は一元化していく。しかし、島田は新たな状況

にうまく対応できず、依然として 1930 年代の解釈を堅持し、「台湾文学」と「外地文学」を区別して扱ったため、現在にまで至る誤解が生じた。最大の問題が、『華麗島文学志』の結論として書かれた在台日本文学史を「台湾文学史」と見なされたこと、および日本人に向けて要求した「エグゾティスム」を、台湾人にも文学の課題として受けとめられたことである。そこで、「エグゾティスム」批判と「レアリスム」の提唱をめぐる議論が起きるわけだが、島田の真意は理解されなかった。

一方、文学史については、黄得時が島田の「外地文学史」に対抗すべく、台湾人を主体とした「台湾文学史」を立ち上げた。島田は黄に反論することはなかったが、それは島田自身が台湾の文学はそれぞれの立場で考えよ、と説いていたからである。ただし、島田の「外地文学史」が結果として「台湾文学史」との対立構造を招いたことは、比較文学者の仕事としては失敗であろう。

第六章では、1940 年代に発表された「南菜園の詩人籾山衣洲」を、「ナショナリズム」と「郷愁」のテーマを中心に読み解いてきた。昭和ナショナリズムが高揚する時期に、島田は「明治ナショナリズム」に向き合い、国家と個人のあり方を見据えていたのである。島田は戦後、広瀬武夫や秋山真之らが海外に出て異文化や他者との交流を経て、自他のナショナリズムを認識する過程をあえて「ナショナリズム」と呼んだが、籾山衣洲や島田自身の台湾体験からは、植民地では真の意味での交流がなされず、自らのナショナリズムを豊かにする機会も閉ざされていたことが明らかになった。

一方、島田は籾山衣洲の中に「広義の郷愁」のテーマを見出すが、これは明治期から昭和の時代に至るまで、在台日本文学の底に一筋の水脈を形成していた、「熱帯の憂鬱」とも言うべき、植民地統治者の心理を蝕むマイナス感情の総体であった。島田は衣洲の「郷愁」を追うことによって、国家から身を引き離し、個人の中へと立ち返っていくのであるが、これは太平洋戦争中、島田謹二が反国家主義・反戦の立場を選ぶことを予告するものであった。

島田が時局に迎合しなかったのは、西欧の知識人と連帯していこうとする強い意識が働いたからだが、反対に台湾人に対してあくまで境界線を引き、積極的な交流を図ろうとしない態度は、植民地主義の堅持に繋がった。

結局、比較文学の観点から見ると、『華麗島文学志』が如実に物語っているのは、島田謹二の「比較文学の精神」が西洋と台湾・中国に対して一様には働かなかったということである。「文学の国際主義」によって、島田が尊敬と友情を結ぼうとしたのは西洋のみであり、台湾や中国に対しては、成長の過程で刷り込まれた蔑視や賤視を克服することはなかったのである。これが、戦前の島田謹二の比較文学思想の到達点と限界であったといえるだろう。

一方、日本統治時代の「台湾文学史」における『華麗島文学志』の意義は、領台以来の日本文学の流れを明確化しただけでなく、内地から自立した台湾独自の文学の育成を説き、その方向性を示したたことにあるだろう。特に評価すべきは、それをただ台湾内部に限っ

て考察しただけでなく、世界の「外地文学」との比較考察を通して、史的な傾向と将来の課題を見出したこと、また内地の文芸思潮や文芸団体との関連を跡付けた点である。ただし、プロレタリア文学を論じないなど、イデオロギー的な偏向が鮮明であった上に、比較文学者の仕事としては当然なされるべきであった台湾人との交流関係の考察には欠けており、これが最大の欠陥といえるだろう。

以上が、本論を通して明らかになった点であるが、『華麗島文学志』が台湾の「日本文学」研究であることが確認できたことで、今後、従来の議論を洗い直すと同時に、新たな角度からの議論も期待できるであろう。その意味で、本論は初歩的な研究に過ぎないのである。